

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 23 日現在

機関番号：82621

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23720086

研究課題名(和文) 無声映画の音 帝政期ロシアにおける初期映画興行研究

研究課題名(英文) Silent Film Sound: A study on the exhibition practices of early cinema in Imperial Russia

研究代表者

大傍 正規 (DAIBO, MASAKI)

独立行政法人国立美術館東京国立近代美術館・その他部局等・研究員

研究者番号：40580452

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は「無声映画の音」という観点から、帝政期ロシアにおいて発行された映画雑誌を網羅的に分析することで、帝政期ロシアにおける初期映画興行の全体像を明らかにする際の基盤を構築した研究である。本研究を通じて、第一次世界大戦以前に世界の初期映画興行の9割近くを占有し、世界各国の映画製作に少なからぬ影響を与えたフランス映画の視覚的な無国籍性とは対照的に、帝政ロシアにおいて提供されていた無声映画の伴奏音楽に、ナショナルな先行メディアムの影響が見られたという事実が明らかになった。これらの学術的成果について、国内における紀要論文の刊行や、国際的な映画雑誌における英・仏語論文の刊行等によって公表した。

研究成果の概要(英文)：This research focuses on deepening the knowledge about silent film sound in Imperial Russia by exhaustively analyzing the movie magazines of the time. Counting for more than 90% of the total film production of the time, the French movies were the most viewed. We showed that the accompaniment music of silent films in Imperial Russia is tinted with national music tones - which strongly contrast with the French movies, highly influential but visually stateless. Those results were published in Japanese, French and English in specialized film magazines.

研究分野：映画史、映画学

キーワード：無声映画の音 帝政ロシア 初期映画 日露戦争記録映画 比較映画史 マックス・ランデー

1. 研究開始当初の背景

映画学における音研究は、映画学者リック・アルトマンが編集した論文集『映画ノ音』(Yale French Studies, 1980)を嚆矢とする。このパイオニア的役割を果たした論集に続き、1985年には、リズ・ワイスが編集した論文集『映画の音』(Columbia)が刊行される。これらの論集では、映画と音に関する理論的、歴史的、音楽的考察のみならず、作品分析をも含めた目配りの利いた編集がなされているものの、そこで取り上げられたのは、ルネ・クレールのような音響のパイオニアによる画期的成功、アルフレッド・ヒッチコックのような変革者による音響スタイル、そしてJ・L・ゴダールなど、少数の傑出した映画作家らによる独創的な映画音楽であったため、無声映画期の日常的なサウンド・プラクティスが過小評価されるという課題が残った。その後、リック・アルトマンの大著『無声映画の音』(Columbia, 2004)が刊行され、アメリカにおける無声映画の音研究は一定の成果を収めつつあるが、アメリカ映画が制度化される以前に世界の映画市場を席卷していたフランス・パテ社の作品を受容した国々のサウンド・プラクティスに関する研究は手つかずのままであった。

また、初期映画時代のサウンド・プラクティスについて調査するうえで、絶えず大きな問題として立ち現われて来たのが、基礎的な一次資料である映画館のプログラムや、映画雑誌の大半が散逸してしまっていることが多く、研究の対象となる資料が断片的なものに留まってしまうという点であった。世界的に入手が困難な無声映画期の映画雑誌が比較的まとまった形で残されている帝政期ロシアの蓄音機・映画雑誌の分析を行えば、無声映画興行における音の役割のみならず、帝政期ロシアにおける初期映画の変容過程や映画興行の全体像について、より具体的に明らかにすることが可能であろう。

2. 研究の目的

本研究は、帝政期ロシアにおいて刊行された無声映画期の蓄音機・映画雑誌(1907-1918)を分析することで、第一次世界大戦以前に世界の映画市場の9割近くを占有し、世界各国の映画製作に少なからぬ影響を与えたフランス映画の視覚的な無国籍性とは対照的に、そこで提供された伴奏音楽に、ナショナルな先行メディアムの影響が色濃く見られたという事実を明らかにすることを主な目的とする。その事実を踏まえた上で、伴奏音楽の民族性を媒介として、帝政ロシア映画が視覚的な民族性を獲得してゆくプロセスを解明することを第二の目的とする。最終的には、「帝政期ロシアにおける初期映画興行」の全体像を明らかにする際の基盤を確立することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、帝政期ロシアにおいて「音」とともにあった初期映画興行の実態を明らかにするため、当時刊行された蓄音機・映画雑誌の集中的な調査が必要である。具体的には、同資料群を所蔵する早稲田大学戸山図書館において、帝政期ロシアで最大規模の情報量を誇る蓄音機・映画雑誌『シネ・フォノ』(Сине-Фоно, 1907-1918)の調査を行うとともに、早稲田大学演劇博物館 GCOE がロシアの「ゴス・フィルムフォンド」から購入した帝政期ロシアのフィルムに関する調査も併せて行う。さらに、ロシア現地の映画研究者にインタビューを実施するとともに、帝政期ロシアで発行された新聞類の調査を行なうため、ロシアに調査出張を行う。

4. 研究成果

1) 2011年度は、早稲田大学連携研究拠点の公募研究「帝政期ロシア映画関連資料の多角的研究」(研究代表者・大傍正規)と連携しつつ、帝政期ロシア映画研究に関する「基本文献リスト」を作成すると

ともに、日本国内の研究機関が未所蔵の重要文献『映画学紀要 Киноведческие записки』1-25号を入手し、帝政期ロシアで刊行された蓄音機・映画雑誌を分析するための研究基盤を整備した。同研究基盤をもとに、2011年12月に開催された日本映画学会第7回全国大会において、研究発表「ソヴィエト映画の出発点—帝政期ロシアにおける初期フランス映画と音の共鳴」を行った。具体的には、帝政期ロシアにおいて発行された『シネ・フォノ *Сине-Фоно*』(1907-18)、『キネ・ジュルナル *Кине-Журналь*』(1910-17)、『シネマ・パテ *Синема-Пате*』(1910-14)、『キネモ *Кинемо*』(1910-11)といった蓄音機・映画雑誌を横断的にひもときながら、革命前のロシアにおいて初期フランス喜劇映画が賑やかな音と共に受容されていたことを指摘した上で、そうした事実が、ソビエト映画の出発点においても、重要なモメントとなっていたこと、すなわち、初期フランス喜劇映画に親しんでいたセルゲイ・ユトケヴィチをはじめとするソビエトのアヴァンギャルド映画作家らが、価値転覆的な革命の映画の文法をナンセンスな初期フランス喜劇映画から吸収していたことを明らかにした。

また、公募研究「帝政期ロシア映画関連資料の多角的研究」との連携により、「ロシアにおける帝政期ロシア映画研究の現状」というテーマで、ナターリア・ヌシーノワ全ロシア映画大学映画研究所教授にインタビューを行った。その結果、帝政期ロシア映画研究者として、ロシアのナショナル・フィルムアーカイブであるゴス・フィルモfond所属の Светлана Сковородникова や、Петр Багров といった研究者の存在をご教示頂くとともに、革命前の映画雑誌が閲覧できる場所として、モスクワのレーニン

図書館のみならず、モスクワ郊外のヒムキ市に位置するレーニン図書館新聞コーナーや、演劇関係者協会 中央図書館(СТД)等があること、また歴史図書館(Историческая библиотека)に、豊富な種類の新聞が所蔵されていること等が明らかになった。

- 2) 2012年度は、帝政期ロシアの映画雑誌の中で、質量共に最大の媒体である『シネ・フォノ』の目次のリスト化を継続して行うとともに、同誌に掲載されているパテ社(仏)、ゴーモン社(仏)、ハンジョンコフ社(露)、ドラニコフ社(露)等により当時公開された新作映画のタイトル、ジャンル、フィルム長、価格等のデータベース化を行った。また、帝政期ロシアで刊行された映画雑誌群を渉猟する中、とりわけ映画初期の喜劇王マックス・ランデーへの言及が際立っていたため、帝政ロシアにおいて公開されたランデー作品のフィルモグラフィを作成・分析し、続いて日本におけるマックス・ランデー公開作品のフィルモグラフィを作成するとともに、音と結びついたランデー受容の実態にも触れることで、そのスターダムの共時的な越境性を顕在化させると同時に、両国それぞれの歴史的特殊性を浮かび上がらせることができた。その結果として、これまで学術的交流を続けてきたフランス・パテ社研究の第一人者であるローラン・ル・フォレスティエ教授(レンヌ第二大学)や、ローラン・グイド教授(ローザンヌ大学)からスイス・ローザンヌで開催された「マックス・ランデー国際シンポジウム」に招待を受け、これまでの研究成果を招待講演「Max au Japon, vers une nouvelle gestualité comique」及び、関西大学が主催する東西研での招待講演「新しい身体性と編集のリズム 越境者マックス・ランデーに注がれたまなざし」

という形で、国内外の研究者らと共有することができた。

- 3) 2013年度は、2012年度途中の東京国立近代美術館フィルムセンターへの所属研究機関の変更に伴い、同館の通常業務である映画フィルムの収集、保存、復元及びアクセス対応が研究時間の大半を占めるようになったため、十分な研究時間を確保できなくなったものの、これまでの研究の集大成である博士論文「仏・露・日における無声映画の音—初期フランス映画の受容研究」（2013年7月23日、京都大学大学院人間・環境学研究科共生人間学専攻 博士号取得）を提出することができた。同論文は、仏・露・日の無声映画興行において「音」が果たしていた役割を比較映画史的に考察することにより、初期フランス映画の受容がもたらした日露両国の初期映画の変容過程において「音」が果たしていた役割を実証的に解明した論文である。また、昨年度の招待講演で行った口頭発表を、論文「越境するスターダム 帝政ロシアと日本におけるマックス・ランデーの受容」（堀潤之・菅原慶乃編『越境の映画史』、関西大学出版部、2014年3月、pp.57-98）にまとめた。
- 4) 最終年度は、本研究で使用してきた映画雑誌や文献等を現所属機関の業務にも一部結びつける形で活用した。具体的には、東京国立近代美術館フィルムセンターが所蔵する日露戦争記録映画群のカタログिंग作業を行うことを通じて、琵琶等の伴奏音楽と共に受容されていた日露戦争興行の実態を明らかにするとともに、同映画群が、世界的にもオリジナル版の現存が確認されていない『旅順の降伏』（ジョゼフ・ローゼンタール撮影、1905年）の「複数バージョン」を構成していることを明らかにした（「日露戦争記録映画群のカタログिंग—ジョゼ

フ・ローゼンタール撮影『旅順の降伏』の複数バージョン」『東京国立近代美術館紀要』、19号、pp.42-94、2015年）。同研究は、英語論文「The Multiple Version of Joseph Rosenthal's *Siege and Surrender of Port Arthur* (1905)」として、国際フィルム・アーカイブ連盟が発行する学術誌『Journal of Film Preservation』にも掲載され、本研究の学術的意義を広報し、成果の社会的還元を図ることができた。さらなる国際的な研究成果の発信として、帝政ロシアにおいて様々な伴奏音楽とともに受容されていた映画初期の喜劇王マックス・ランデーについて考察したフランス語論文「La traversée d'une star : L'impact de Max Linder au Japon et dans la Russie impériale」が、フランス語圏の学術誌『1895』の最新号に掲載されることが決定している。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- (1) Masaki Daibo, "The Multiple Version of Joseph Rosenthal's *Siege and Surrender of Port Arthur* (1905)," *Journal of Film Preservation*, vol.92, 2015, pp.53-62.(査読無)
- (2) 大傍正規 「日露戦争記録映画群のカタログिंग—ジョゼフ・ローゼンタール撮影『旅順の降伏』の複数バージョン」『東京国立近代美術館紀要』、19号、42-94頁、2015年。(査読有)
- (3) Masaki Daibo, "La traversée d'une star : L'impact de Max Linder au Japon et dans la Russie impériale," *1895 (Mille huit cent quatre-vingt-quinze)*, vol.76, 2015年度中に刊行予定。(査読無)

〔学会発表〕(計 8 件)

- (1) 大傍正規「ソヴィエト映画の出発点—帝政期ロシアにおける初期フランス映画と音の共鳴」、日本映画学会、京都大学大学院人間・環境学研究科棟地階大会議室、2011年12月3日。
- (2) Masaki Daibo, "Before Reimei: Early Attempts to Produce Talking Japanese Cinema through the Phonograph", SCMS(Society for Cinema and Media Studies), The Boston Park Plaza Hotel & Towers, Boston, 21 March 2012.
- (3) Masaki Daibo, "A Dynamic of Eclecticism: The Aesthetics of Audio Visualisation during the Transition to Sound in Japan", Yale University, LC213--Linsly-Chitenden Hall Room 213, 28 March 2012.
- (4) Masaki Daibo, "Reception of Film d'Art and its Impact on Japanese Sound Culture." 12th International Domotor Conference: Performing New Media, 1890-1915, University of Brighton, 22 June 2012.
- (5) Masaki Daibo, "Max au Japon, ver une nouvelle gestualité comique," Colloque international: Max Linder et le comique début de siècle," Cinematheque Swiss, 4 Octobre, 2012.
- (6) 大傍正規「新しい身体性と編集のリズム 越境者マックス・ランデーに注がれたまなざし」東西研(招待講演)、関西大学千里山キャンパス以文館4Fセミナースペース、2013年2月9日。
- (7) 大傍正規「仏・露・日における無声映画の音—初期フランス映画の受容研究」、博士論文公聴会、京都大学大学院人間・環境学研究科人環棟演習室 233、2013年6月20日。
- (8) Masaki Daibo, "War films in the Far

East: Cataloguing the war films before the World War , " 70th FIAF Congress, Scopje(Macedonia), 6 May 2014.

〔図書〕(計 2 件)

- (1) 大傍正規「共鳴する身体と音—喜劇映画の「笑い」を増幅する音響効果」、遠藤英樹・松本健太郎・江藤茂博(編)、『メディア文化論』、2013年、ナカニシヤ出版、137-153頁。
- (2) 大傍正規「越境するスターダム 帝政期ロシアと日本におけるマックス・ランデーの受容」、堀潤之・菅原慶乃(編)『越境の映画史』、2014年、関西大学出版部、57-98頁。

6. 研究組織

- (1) 研究代表者
大傍正規 (MASAKI DAIBO)
東京国立近代美術館フィルムセンター
研究員
研究者番号: 40580452